

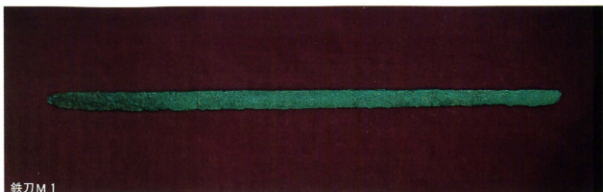
美作町埋蔵文化財調査報告第1集

大塚五号墳

—町道大谷線拡幅工事に伴う発掘調査報告書—

2002

美作町教育委員会



第5号墳出土 鉄刀、鈔



現地説明会

序

岡山県美作町は岡山県北東部に位置し、古くから湯郷温泉を中心に栄えてきました。また、南北に梶並川、東西に吉野川が流れ、古来から人々が住み、町内には数多くの遺跡が存在し豊かな文化を育んでいます。

町内には早くから、道路網が完備されていましたが、近年には、車社会の発展により、古い道路網の拡幅工事が町内各地で行われています。このたびの調査は、湯郷から勝岡田へと続く拡幅工事路線の拡幅部に古墳が発見されたことを契機とするものです。すでに一部拡幅工事が始まっていたため、やむを得ず記録保存の処置をとることとなりました。

調査の結果、予想以上の成果を得ることができました。これまで、この地区の埋蔵文化財についてはあまり知られていませんでしたが、本調査を通じて、町の歴史の空白を埋める重要な成果があげられたものと思われまます。

この報告書が、文化財の保護と活用に広く利用され、また調査機関・各研究方面においてその一助ともなれば幸いです。

終わりにになりましたが、調査にあたっては、多岐に渡りまして様々なご尽力をいただきました地権者をはじめ、発掘調査に参加いただいた方々、岡山県教育委員会、勝岡町教育委員会の皆様には多大なるご理解、ご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

平成14年3月31日

美作町教育委員会

教育長 森 本 雅 英

例 言

1. 本書は、岡山県英山郡美作町中山地内に所在する大塚5号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、町道大谷線拡幅工事に伴うもので、美作町教育委員会が平成12年に発掘調査し、平成13年に整理、報告書作成作業を実施したものである。
3. 調査及び本書の執筆編集は、美作町教育委員会教育総務課 池田 和雅が担当した。
4. 本報告にかかる遺物・写真・図面は美作町教育委員会で保管している。
5. 本書の作成にあたり、現地調査及び整理作業時に各関係機関をはじめ、多くの方々には有益なご教示、ご指導を賜ったことに感謝の意を表します。

石室実測作業：岡山県教育委員会 尾上 元規 勝央町教育委員会 團 正雄
現地調査指導：岡山県教育委員会 松本 和男 岡山県教育委員会 尾上 元規
報告書作成：くらしき作陽大学教授 河本 清 岡山県教育委員会 松本 和男
岡山県教育委員会 尾上 元規
津山弥生の里文化財センター 安川 豊史

6. 発掘調査に際して以下の方々のご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

発掘調査：美作町ミニシルバー人材センター

安東三夫・石田 完・真森千代子・川野房人・福田裕之・山本田作・山本みどり

整理作業：稲谷知子

凡 例

1. 本書の示す標高地値は東京湾標準潮位（T.P）を基とし、方位は磁北を指す。
2. 本書に掲載した遺物は、土器、金属製品にわけて通し番号を付け、土器以外については、下記の番号の前に付いている。

金属製品：M

3. 本書に掲載した土器の断面を黒塗りしたものは須恵器、白抜きの場合は土師器を示している。
4. 本書における須恵器坏類の型式名称は、陶邑須恵器窯継年に使用されているものを用いる。
5. 本書における遺構及び遺物実測図（基本的に1/3縮尺）の縮尺については明記して縮尺を示し、遺構の土色名、土器観察表における色調は、新版標準土色帳（1988年版）（農林水産省・農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修）によっている。

本文目次

第1章 遺跡の地理的・歴史的環境について	1
第2章 調査の経緯と経過	3
1. 発掘調査にいたる経緯	3
2. 発掘調査の経過	3
第3章 大塚5号墳の調査	5
1. 墳丘	5
2. 石室	6
3. 遺物の出土状況	7
4. 石室出土遺物	8
(1) 土器	8
(2) 金属製品	13
(3) その他の出土遺物	14
第4章 まとめ	16
1. 大塚5号墳の築造時期について	16
2. 大塚5号墳の被葬者について	17

挿 図 目 次

図1	大塚5号墳周辺遺跡分布図	1
図2	林野高校MDP	4
図3	調査位置図	5
図4	トレンチ十層断面図	5
図5	石室	6
図6	石室出土状況図	8
図7	石室出土遺物(1)	9
図8	石室出土遺物(2)	10
図9	石室出土遺物(3)	11
図10	石室出土遺物(4)	12
図11	石室出土遺物(5)	13
図12	石室出土遺物(6)	14
図13	その他出土遺物	15

表 目 次

石室出土土器観察表	18
-----------	----

写真図版目次

巻頭図版	第5号墳出土 鉄刀 鈎、現地説明会
図版1	発掘調査前状況、横穴式石室完壁状況
図版2	石室東側写真、石室西側写真、トレンチ断面
図版3	出土遺物(1)
図版4	出土遺物(2)
図版5	出土遺物(3)、その他の出土遺物

第1章 遺跡の地理的・歴史的環境について

大塚5号墳は、岡山県の北東部、英田郡美作町大字中山小字梅ヶ口1366番地に所在する。吉井川の支流である吉野川をさかのぼると、さらに支流となる大谷川に分岐する。大谷川は、奥大谷山塊の谷間を南東に流れており、集落は大谷川に沿って形成されている。美作町中山地区は、大谷川に沿って形成された集落と勝岡田盆地へ続く街道に沿って形成された集落とにわかれる。今回調査を行った大塚5号墳は、大谷川に沿って形成された集落が途切れ、奥大谷山塊から南東に張り出した舌状地の南側斜面に位置する。

本古墳周辺において、人々の生活の痕跡がうかがえるようになるのは弥生時代中期以降で、南東約300mの丘陵上に弥生後期から古墳時代前期にまたがる遺跡としてカネメツケン遺跡がある。また、本古墳を発掘調査する際に、付近の田畑から弥生中期のものと思われる土器片が採集できた。

古墳時代に入ると、多数の古墳が築かれるようになる。築かれた古墳のほとんどが後期古墳に属するもので、大塚5号墳を含む大塚古墳群、向古墳群、梯子山古墳群、大河内古墳群、勝央町七十古墳群などいくつかの小規模な古墳群を形成している。大河内古墳群にはこの時期美作地区では大型とされる墳径が20mを越す円墳もあり、古墳群の盟主的存在と考えられる。これら古墳群は、山間の奥まった谷部の斜面に立地している。また、横穴式石室をもつものが多いことや、向古墳2号墳や七十古墳群に含まれる鏡亀古墳など陶棺の出土が伝えられている古墳もあることから、6世紀末から7世紀



- 1.大塚5号墳
- 2.大塚1号墳
- 3.大塚3号墳
- 4.大塚2号墳
- 5.大塚4号墳
- 6.阿津田神社裏古墳
- 7.高ノ後遺跡
- 8.堀田出土地
- 9.カネメツケン遺跡
- 10.向1号墳
- 11.向2号墳
- 12.サガ4号墳
- 13.サガ1号墳
- 14.サガ2号墳
- 15.サガ3号墳
- 16.湯ノ峰遺跡
- 17.湯ノ峰古墳
- 18.塚田古墳
- 19.湖大寺遺跡
- 20.小学校前散布地
- 21.池ノ内散布地
- 22.大河内池遺跡
- 23.大河内古墳群
- 24.鏡亀古墳
- 25.大谷城
- 26.大谷古墳
- 27.梯子山1号墳
- 28.梯子山2号墳
- 29.萩原塚
- 30.矢ノ久保1号墳
- 31.矢ノ久保2号墳
- 32.八子谷遺跡
- 33.中山2号遺跡

図1 大塚5号墳周辺遺跡分布図(1/25,000)

末を中心とする後期小規模古墳群であると想定される。

一方、古墳時代の集落址としては、明確な遺跡は確認されていないが、先述したカネメツケン遺跡に加え、本古墳より南西約100mにある宮ノ後遺跡では、古墳時代後期の須恵器片が出土している。また、南東約1.5kmの源大寺遺跡では、開けた平野に陶棺出土の古墳が存在し、須恵器片が広い範囲で散布しており、古墳と古墳時代集落跡の存在が考えられる。

本古墳の所在する中山地区の付近には、勝間田焼と呼ばれる中世須恵質土器の窯跡が古くから多数確認されている。本古墳から北西500mにある下大谷地区の八子谷窯跡では、古代の須恵器や勝間田焼が採取でき、古代から中世の窯跡と考えられる。また、北500mの位置にも勝間田焼窯跡とされる大河内池窯跡が存在する。発掘調査中にも、地元の方から大塚5号墳より北200mにあるゴルフ場開発時に採集された勝間田焼片を多数いただいた。同じ山境である勝央町側の谷筋では、勝間田焼の窯跡が認められている。以上のことからこの地域一帯が勝間田焼の生産地の一つであったと推測される。

また戦国時代には、本古墳より北西約500mの位置に大谷城がある。この山城は、一説には東美作一帯を治めた後藤氏が三星城落城のおり、追っ手から西へ逃れるために築城されたものとされ、大塚5号墳が築かれた谷筋が北西の勝間田盆地へと続く街道として古くから使われていたものと考えられる。

参考文献

- 岡山県教育委員会 『岡山県遺跡地図』 第四分冊 1975年
文化庁 『全国遺跡地図 岡山県』 1985年
石田 宗生 「湯郷八子谷窯址発掘の経験」『吉備地方史』14号 1995年
西川 宏・今井 堯 「吉備地方須恵器編年資料集成」『古代吉備』2号 1958年
湯郷高校郷土史研究会 「先八子谷窯跡発掘の報告」『吉備地方史』12号 1954年

第2章 調査の経緯と経過

1. 発掘調査にいたる経緯

平成12年9月に町道大谷線拡幅工事に伴い、土地所有者から「工事範囲に古墳らしきものがある」との報告を受け、美作町建設課から美作町教育委員会に現地確認の要望を受けた。この要望を受け、現地確認を行った。その結果、拡幅予定地内において、横穴式石室をもつ1基の古墳が確認された。現地調査の結果について、町建設課へ説明し、路線変更を含めた事前協議を行った。しかし、拡幅工事予定地の買収等が既に済んでおり、計画変更が困難であることから、やむをえず、記録保存のための発掘調査を実施することとした。町教育委員会では早急に発掘調査に向けての調整を行い、平成12年10月30日から11月にかけて実施することとした。

調査体制

美作町教育委員会

教 育 長	森本 雅英
教育総務課長	江見 建人（平成12年度）
	田村 文雄（平成13年度）
教育総務課長補佐	小林 齊
生涯学習係長	川野 修
主 事	池田 和雅（調査担当）

2. 発掘調査の経過

大谷5号墳の墳丘はすでに水田により削平されており、墳丘盛土の残存状況が良くないが、水田の東南部隅の畦部が2m四方残されており、また天井石、側壁と見られる石室石材が畦部に露出していることから、古墳と確認できた。規模については、墳丘東側はすでに畦道、水田により削平されており、また北側に至っては、計画路線範囲外にあり、保存するため、墳丘の発掘調査は石室主軸より西側に直交して設定したトレンチのみの調査にとどめた。また、主体部となる石室は、天井石と見られる石材が石室幅より小さく原位置を保っていなかったため、取り除いたところ石室が北側に伸びることが判明した。このため、石室北側については、計画路線範囲外であったが石室内全面を発掘調査した。石室内は中世以降の擾乱によって破壊されていたが、石室床面付近については予想以上に残りがよく須恵器、鉄鏃、鉄刀、鉄滓などが出土した。このため、これら予想されなかった遺物の出土により、予定調査期間を1週間延長し、12月5日に発掘調査を終了した。

なお、美作町では少ない横穴式石室の調査であり、まとまった遺物が出土したため、12月4日月曜日の午前、現地説明会を開催し、地元の方々を中心として約30名の参加者を得た。また、11月22日水曜日には林野高校の生徒の皆さんが、「総合的学習（MDP（マイ ドリーム プロジェクト）」）の一環として、発掘調査に参加していただいた。記して感謝の意を表する。

日誌抄

10月30日(月) 調査開始 除草作業 測量調査

- 10月31日(火) 第1トレンチ掘削
11月8日(水) 全体掘り下げ
11月10日(金) 石室掘り下げ
11月22日(水) 林野高校生徒「総合的学習」の一環により来訪発掘調査体験
12月1日(金) 掘り下げ作業終了
12月4日(月) 現地説明会開催
12月5日(火) 調査終了



図2 林野高校MDP(マイ ドリーム プロジェクト)

現地調査にあたっては、地権者をはじめとする下記の方々のご協力をいただいた。記して感謝いたします。

中村 和之 古川 武志

第3章 大塚5号墳の調査

1. 墳丘

大塚5号墳の墳丘については、前章で述べたとおり水田や道路によって、かなりの破壊を受けており、調査範囲も限られていたことから、石室主軸より西側に直交して設定したトレンチのみの調査にとどめた。このトレンチから、地表面より下30~50cmまで中世の土器の混じる層であり、墳丘の盛土はほとんど削平されていた。石室主軸より3.5m範囲の地表面より下30cmでは黒褐色の古墳築造当時の地層がみられたが、この下の層は地山となるため、古墳築造時の旧表土と考えられるが、盛土の可能性も考えられる。また、石室主軸より3.5mの位置に幅50cm、深さ30~50cmの溝が確認でき、不明確ながら周溝の可能性が考えられる。しかし、この溝が本古墳の周溝と考えると石室主軸に直交する墳丘の最大径は8m弱と想定され、石室の規模を考えると墳丘より石室がはみ出してしまう。このため大塚5号墳が方墳であるか、もしくは中世以降の攪乱によるものの可能性もある。主軸ラインでの墳丘径については、すでに前面を道路によって削平されているため不明である。墳丘の高さについても、手がかりがなく不明である。

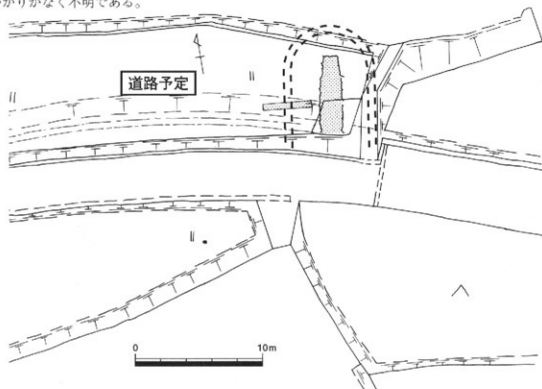


図3 調査位置図(1/300)

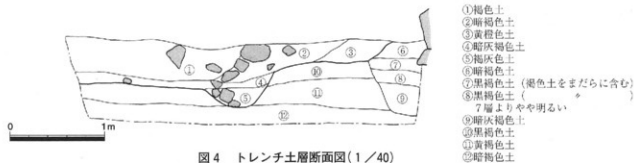


図4 トレンチ土層断面図(1/40)

2. 石室

本古墳の埋葬施設は、床面での現存長6.2m、幅1.2~1.8mを測る無袖式の横穴式石室である。当初天井石とみられる約80cmの石が一石露出していたが、原位置を保つものはなかった。さらに石室前面は既に道路によって大きく削平されているため、現状より石室がさらに南へ数m続いていたものと考えられる。側壁は現状で高さ0.9~1.7mが残存している。石室の主軸はN-31°-Eである。石室内部は拳大から人頭大の石、中世土器が上砂で埋まっていた。奥壁については、基底部に高さ約70cmの一枚石が腰石として残っているのみで、上段部については、後世の攪乱により失われていた。側壁は、いずれも持ち送りが認められず、ほぼ垂直に積まれている。使用されている石材は、高さ40~80cm位

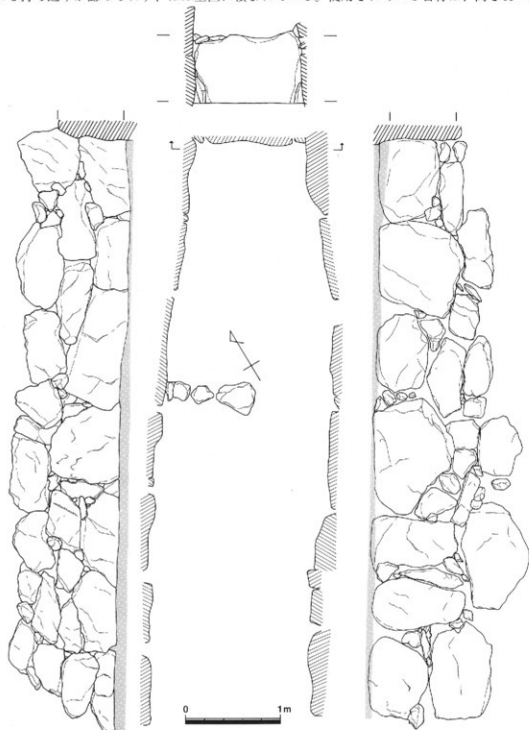


図5 石室(1/40)

の大きさで、おおむね2～3段に積まれている。下段は80cm前後の腰石で構成し、上段はやや小型の石材を横長に積んでいる。また、東側壁面をみると奥壁より5石目と6石目の腰石は縦長に立てて用いており、平面的にこの部分が内側にやや突出する。この状況は西側壁には見られないが、同じ付近で腰石の積み方が変化しており、玄室と羨道を分ける役割があったと考えられる。また、石室床面では、中央付近の西寄りに幅20～40cm大の石が3つ並んで配置されており、棺上にしては、幅が広く石表面も平坦でなかったことから、仕切り石の可能性はある。石室中軸から東側にかけては、配置された形跡はなかった。

3. 遺物の出土状況

石室内の遺物は、52点出土した。出土位置は仕切り石と考えられる石材を境に北側のA群と南側のB群とにわかれて出土した。特に、A群では西側壁に沿って、B群では仕切り石付近に集中して出土した。石室床面付近は攪乱を受けた形跡はないが、遺物は全体に西側に著しく偏った出土状況を示している。以下、奥壁側からA群、B群と順にみていく。

A群では須恵器、鉄鏃、刀子、鉄刀、鉄滓が出土した。A群からの出土須恵器は23点を数える。奥壁際では、奥壁に寄りかかった形で長頸壺(44)が出土した。奥壁から約50cm南の位置からは、西側壁より杯類(1・2・3・8・15)、埴(40・41)、椀(29)が出土した。奥壁より1.5m南からは、東側壁に沿って、杯類(5・6・7・16・17・18)が出土し、中には、重なった状態で出土したものもあった(16・18)。中央には平瓶(46)と平瓶片(49)が出土した。奥壁より南へ2mの位置で東側壁に沿って杯類(9・21・22)が出土したが、石室主軸より東側では、A群、B群を含めてこれら3点のみの出土であった。鉄器については、奥壁より80cm南の西側壁沿いに用途不明鉄器(M5)が主軸にはほぼ直交する形で出土した。鉄刀(M1)は、奥壁から西側壁沿いに南へ1.1mの地点から主軸に沿って、切先を奥壁に、刃部を中央に向けた状態で出土した。また、鉄刀に付属すると考えられる鉄地金銅貼の鐔(M2)が刀身より抜かれたかたちで、鉄刀と重なって出土した。真金具(M3)は、刀身根元と考えられる位置から出土した。

B群は、奥壁から3m付近の仕切り石の南側に集中して出土した。出土した遺物は、須恵器、鉄滓で鉄製品は出土しなかった。B群では、須恵器の数はA群と比べると多く29点出土したが、杯類の出土は目に見えて少なく、全体の2割であり、代わりに高杯、はそう、提瓶など比較的器高のある器種が多く出土した。ほとんどの須恵器は仕切り石を中心に南へ半径70cm以内に出土した。出土土器は、西側壁面から石室中央に向かって、杯類(10・12・19)、提瓶(48)、高杯(25)、椀(31・33)、はそう(35・36・37・38・39)、平瓶(47・50)が出土した。この内平瓶(50)の破片はA群でも出土した。仕切り石付近を除くと、A群と同じく、やはり石室主軸より西側に偏って出土している。仕切り石より南に1m付近の西側壁に沿って提瓶(51)、高杯(24)、坏蓋(11)、1.5mの位置から同じく提瓶(52)、高杯(27)が出土した。出土位置が最南のものは長頸壺(45)で奥壁から4.6mの中央部に出土した。奥壁部より2m以内の廃土中からは鉄鏃(M4)、鉄滓1点、4m付近の廃土中から鉄滓1点が検出されたが、正確な出土位置は不明である。

被葬者が埋葬された棺が幅70cm前後で長さ170cm前後の木棺として、石室内のスペースを考えると仕切り石より北側に2体の埋葬、仕切り石南側についても、2体以上の埋葬が考えられ何度かの追葬が推測される。

4. 石室出土遺物

(1) 土器

石室内からは、52個体の土器が出土した。いずれも須恵器である。

1～13は杯蓋である。法量は口径11.8～13.9cmの間に収まり、器高は3.7～4.7cmの間に収まる。調整はヘラ切り後の調整に若干の違いが認められる。また胎土や轆轤回転の違いから、複数の生産地が想定される。法量や調整によりいくつかの分類が想定される。

14～23は杯身であり、法量は口径10.1～12.1cmの間に収まり、器高は3.5～4.5cmの間に収まる。調整は、杯蓋と同じくいずれもヘラ切り後の調整に違いがある。杯身も杯蓋と同じく法量によって、いくつかの分類が想定される。

24～28は高杯で、脚部に2方向、2段の透かしを持つ24、26と、透かしを持たず脚部中央に2条の沈線のある25、27、28とがある。このうち透かしのある24、26は、杯部に櫛状工具による刻み目文が施されている。透かしを持つ高杯と持たない高杯、また、櫛状工具による刻み目文についても新旧の序列が想定される。

29～34は碗である。浅い器形の31、33、34と深い器形の29、30、32とがある。このうち34は脚部がついているが、碗部の形態は31と類似している。底部調整については、29、30、31は、ヘラ切り後の調整がナデによって仕上げられているが、32、33についてはヘラ切り後回転ヘラケズリを施している。

35～39ははそうである。35、38、39は中型のものであり、全体に生焼けのため、摩擦が激しく調整については不明である。注ぎ口等の作りが非常に雑な作りになっており、39にいたっては、2ヶ所作られている。36、37はいずれも小型であるが、37の口縁部が歪んでいる以外は、精巧に作られており、37の頸部にはカキ目が施されている。

40～43は短頸壺である。40、42、43は頸部が直立しているが、41については外反している。また、いずれの短頸壺も胴部にカキ目が施されているが、40、43は摩り減って稀薄になっている。43については、底部内面に同心円文の当て具痕が認められる。

44は壺である。頸部が短く、形態的に平敷に近いが、胴部の中心に口縁がつくことから、壺に分類した。



図6 石室出土状況図(1/40)



鉄刀出土状況(1/20)

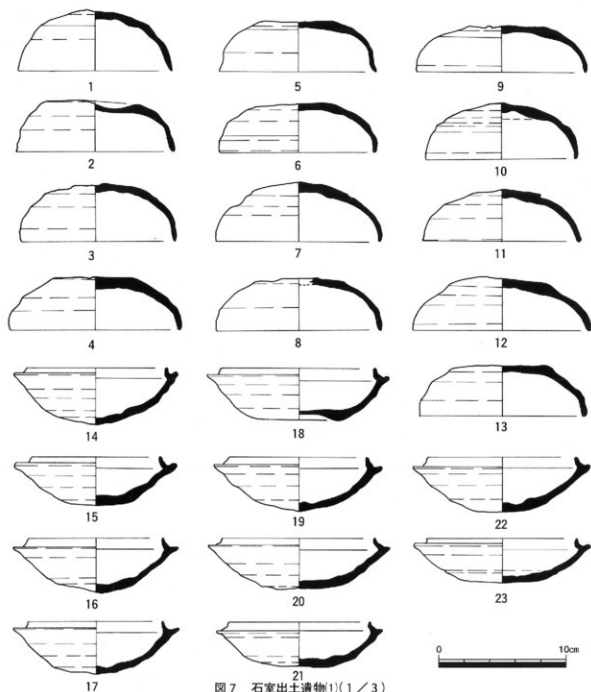


図7 石室出土遺物(1)(1/3)

45は長頸壺で、頸部に2条の沈線が施されている。

46, 47, 50は平瓶である。胴部にはいずれもカキ目が施されている。46は生焼けである。47は、他の2つに比べ口縁部が短い。

48, 49, 51, 52は提瓶である。法量に大きな差があり、最小の49が器高13.1cm、最大の48が器高26.4cmであり、倍以上の差があり、胴部にはいずれもカキ目が施され、摩り減って稀薄になっているものもあるが、49については、焼き・調整とも良好であり、胴部に放射状の刺突文による装飾がなされており、法量からミニチュアと呼べるものである。また、肩部の耳はいずれも円形の貼付文となっている。

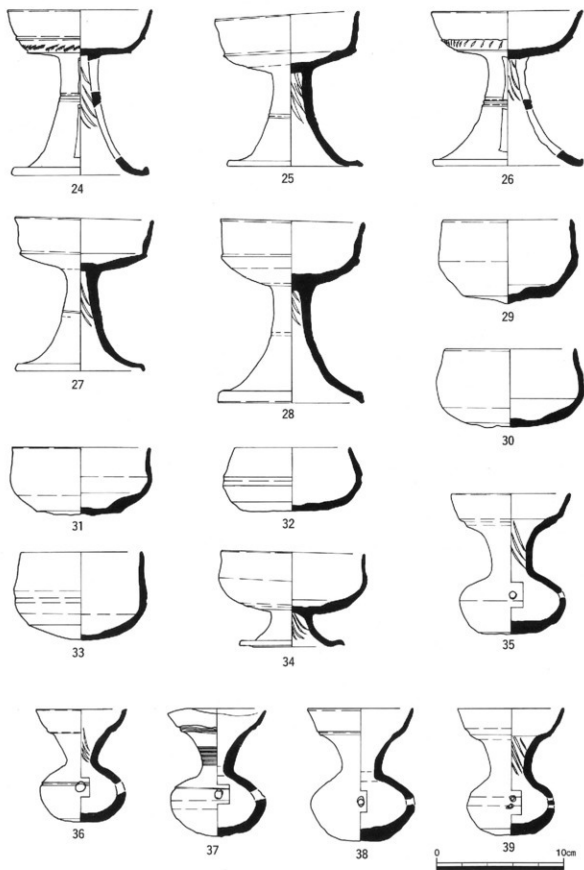


图8 石室出土遺物2(1/3)

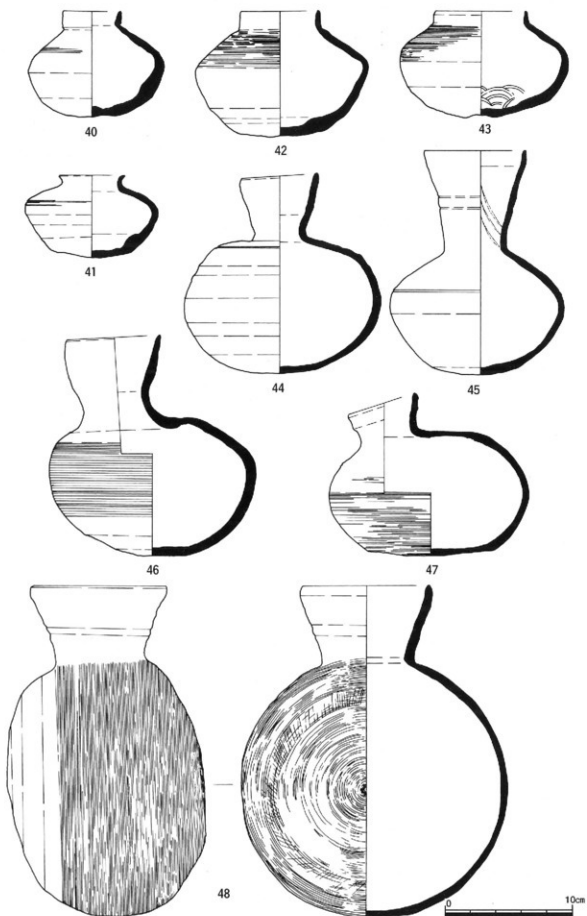


图9 石室出土遗物(3)(1/3)

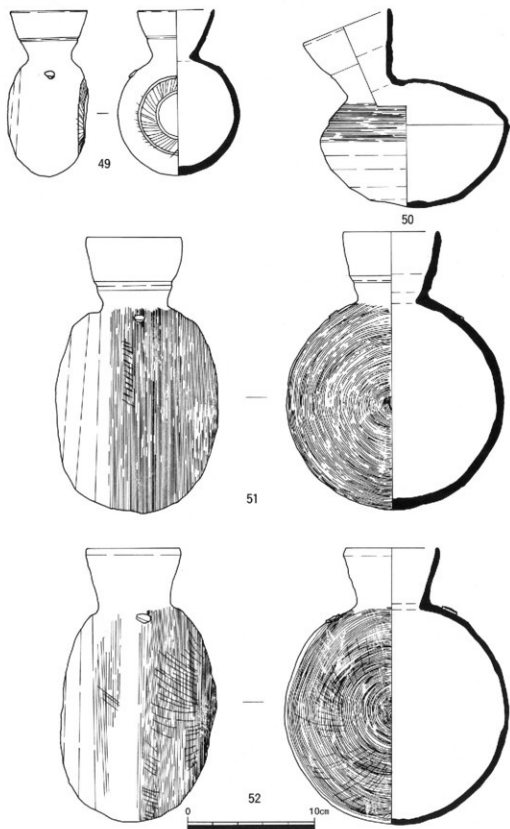


图10 石室出土遺物4(1/3)

(2) 金属製品

金属製品は、鉄刀1、鐏1、鍔1、鍔金具1、鉄鎌1とその他不明鉄器が出土した。

鉄刀（M1）は、全長59cmで、刃部幅2.3cm、厚さ6mmである。小振りでの細い刀身である。切先はフクラ付である。区の部分から茎尻にかけては欠損しているため、柄部については不明である。刀身には木質は認められず、鞘等に納められていた可能性は少ない。付近からは、この鉄刀に付属する鐏（M2）と鍔金具（M3）の一部が出土している。鐏は、鉄地金銅貼の倒卵形で、透かしなどの装飾はなく、長さ4.9cm、幅3.7cm、厚さ1.9mmで象嵌などは認められない。鍔金具も鉄地金銅貼で、変形しているが、長径3.0cm、短径1.9cm、厚さ1mmを測る。鉄刀の刀身根元部分に重なった形で出土しており、この鉄刀に付属するものと考えられる。

鉄鎌（M4）は、茎部と頸部の一部で頸部の半分から鎌身にかけては欠損している。

不明鉄器（M5）は、4.5cm、2mmで断面から刀子の茎部と考えられる。鉄刀より30cm奥壁に近い位置で出土した。

その他の鉄器（M6～8）は、石室内廃土から出土したため、出土位置については不明である。M6は残存長5.2cm、幅1cmの正方形である。断面から鉄鎌の茎部の可能性が考えられるが欠損部分が多いため不明である。

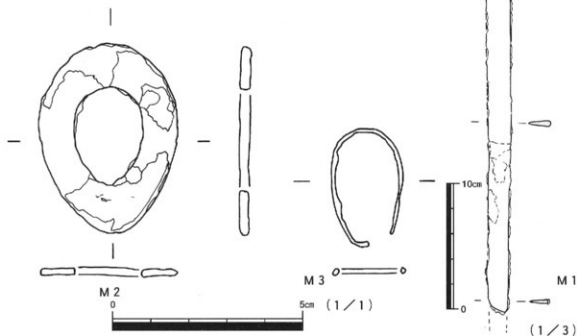


図11 石室出土遺物(5)

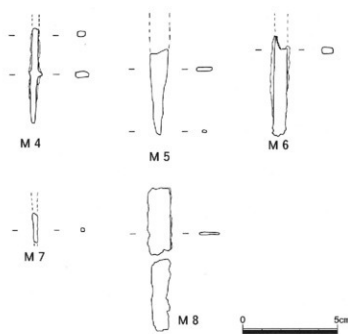


図12 石室出土遺物(6)(1/2)

M7は残存長3.1cm、幅3.3mm、厚さ2.7mmで細い棒状をなし、鉄鏃の基部と推定される。M8は長さ7.2cm、幅1.1cm、厚さは僅か1mmのものである。鉄刀の基部かその他鉄製品の剥離したものと考えられる。

鉄器の出土状況は、鉄刀、鏃などを除いては、非常に悪かったため欠損したものが多く、用途について正確に判明したものはごくわずかであった。

そのほかには、鉄滓が寸法7.6×4.6×2.8cm、重さ57gと3.4×4×2.5cm、重さ32gの2点出土した。

(3) その他の出土遺物

石室内外の中世層より多量の中世土器片が出土したが、粉砕され投棄されていたことや摩滅により復元できたものは土器11点のみであった。復元できなかった遺物を概観して、中世の瓦質煮沸土器が多くみられ、椀などの器物は少量であった。その他には土錘、鉄鏃が出土した。

土器(53~55)は、須恵器である。53は坏蓋で、口径12cm、器高3.5cmである。調整は、ヘラ切り後回転ヘラケズリが施されている。54は坏身で、口径11.2cm、器高3.4cmである。調整は、ヘラ切り後回転ヘラケズリが施されている。55は椀で、口径10.4cm、残存高5.6cmである。調整は、回転ヘラケズリ後ナデが施されている。坏類、椀については、本古墳出土の須恵器と特徴が似ており、中世以降の擾乱を受けた際に石室外に出たものと考えられる。

56~63は中世以降の土器で、56は高台のみで器種は不明であるが、径、器厚等から椀と推定される。高台径は7.4cmを測る。底部に糸切痕は見当たらない。57~61は土師器杯で、法量は口径11.8~12.4cm、器高3.2~4cmに収まる。調整は全体に回転ナデが施されている。57, 58, 60については、低部に糸切痕がみられる。62は瓦質土器の羽蓋で、口径20.6cmを測る。内面はヨコハケが施されている。外面は指押しさえの後斜めにハケを施している。63は瓦質土器の鍋で、口径は32cmである。内面にヨコハケを施し、外面は指押しさえの後回転ナデを施している。64は土錘で、長さ4.4cm、最大幅1.3cmを測る。中央に直径4mmの通し孔がある。M9は鉄鏃で、鏃身先端が二股となる「雁股式」鉄鏃で、長さ8.5cmで幅4mmを測る。石室奥壁部の上層の中世層から出土した。出土状況、鉄鏃の型式から、大塚5号墳に伴うものでなく、中世のものと考えられる。

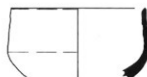
石室内外での多量な粉砕された煮沸土器が出土し、古墳がなんらかのかたちで再利用されたことが想定される。



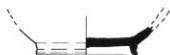
53



54



55



56



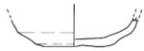
57



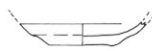
58



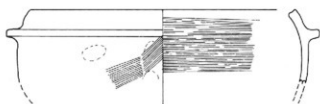
59



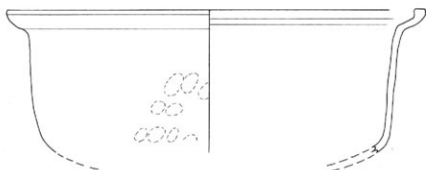
60



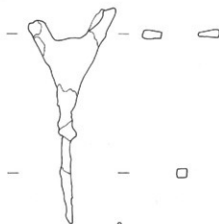
61



62



63



M 9



64



(1/2)



(1/3)

図13 その他出土遺物

第4章 まとめ

1. 大塚5号墳の築造時期について

大塚5号墳の築造時期を考えるにあたって、有効な資料として出土土器がある。特に須恵器については、近年の研究成果⁴⁰⁾によって、畿内の資料に依存していた美作地域での土器編年も解明されつつあるが、資料数の限界から現時点では陶器編年に頼らざるを得ない。したがって本古墳の築造時期について陶器編年を参考に考察していく。

石室内から出土した須恵器は、総数52個体を数える。中でも、杯類は全体の40%以上を占めており、杯類を主体に編年することが、埋葬時期を考える上で、最も効果的であると考えられる。前章で述べたとおり、杯類は法量、製作技法によっていくつかの分類が想定される。以下、杯蓋と杯身の分類を整理する。

分類1—杯蓋(6・7・10)の口径が11.8~12.9cm、器高が4cm前後で、口縁端部が内傾する。調整は天井部に回転ヘラケズリが施されている。セットになる杯身(17・19)10.6と10.9cm、器高4.1と4.3cmで、蓋と同じく天井部には回転ヘラケズリが施されている。

分類2—杯蓋(1・5・9)の口径が12.2~13.2cmの間に収まり、器高が4cm前後で、口縁端部が外反して収まる。天井部周辺に回転ヘラケズリが施されている。セットになる杯身(16)は、口径10.6cm、器高が4.3cmで、調整は蓋と同じく底部周辺に回転ヘラケズリが施されている。

分類3—杯蓋(2~4・8・12~13)の口径が12.1~13.9cmで、器高が4~4.6cmに収まる。調整は天井部の回転ヘラケズリが省略されている。セットになる杯身(14・18・20~23)は、口径11.1~12.1cmで、器高は3.5~4.5cmと幅があるが、全体に扁平であり、口縁部の立ち上がり短く内傾する。調整は底部の回転ヘラケズリが省略されている。

分類4—杯身(15)のみでセットとなる杯蓋は見当たらず、口径10.1cmで底部は回転ヘラケズリが省略される。また、器壁が厚く、端部が丸く取られている。

今回出土した須恵器杯類を分類すると、法量でみると分類3が出土須恵器の上限時期に位置するが、調整でみると分類1が天井部まで回転ヘラケズリを施してあり、丁寧な調整を行っている。また分類2が分類1に続き、共に分類3より古相を呈している。分類1, 2と3, 4では胎土に違いが認められることから生産地の違いによるものと考えられる。

出土した須恵器は、相対的に陶器編年⁴¹⁾のTK209からTK217に位置し、6世紀末から7世紀前葉にあたるものと考えられる。

出土した須恵器の年代で横穴式石室を持つ古墳の年代を決定するには、良好な石室床面での出土状況と明確な遺物の一括性が必要であり、そこから出土した須恵器の上限時期によって古墳の築造時期を決定する。本古墳の石室遺物出土状況を考えると、杯類や碗などの日常使用とされる土器と高杯、はそういった儀式用とされる土器が仕切り石を境に明確に分かれて出土しており、土器の原位置も保たれたものと想定される。また、出土した鉄器を含む遺物が石室西側に偏った状態で出土しており、石室東側の出土遺物がほとんど認められなかった。このことから大塚5号墳に埋葬が行われたのは1

回と考えられる。

以上のことから、出土した土器に多少の年代幅が認められるが、土器の原位置が保たれており、分類1～4の出土位置に区別化が認められないことから出土した土器が一括のものであると考えられる。このことから本古墳の築造が7世紀前半であると推定される。

2. 大塚5号墳の被葬者について

古墳の被葬者の性格を考えるに当たって、有効な資料の一つとして副葬品がある。副葬品だけでは、被葬者の性格全てを判断するのは難しいが、その他判断材料が乏しいため、あえて副葬品から被葬者の性格を述べていきたい。

今回の調査で副葬品と考えられる出土遺物は、鉄刀、鉄鏃、須恵器、鉄器、鉄滓が挙げられる。特に鉄刀は、鉄地金銅貼の鏝などが付属している。また、岡山県北部で副葬品としてしばしば見られる鉄滓が2点出土している。最近の研究で鉄滓の供献が即被葬者の職能としてとらえるのではなく、鉄滓の供献が石室入り口付近での祭祀に用いられたものとし、美術を含む古墳時代後期の古備では、一般的になされていたとする見解がある³⁾。本古墳では、墳丘、石室前面が大きく削平されていたため、石室入り口や墳丘での鉄滓の出土は確認できない。また石室内での出土状況を考えると、廃土中から出土したため正確な位置は特定できないが、高杯やはそのような供献用と考えられる土器周辺の廃土から出土したことから石室入り口付近での祭祀ではなく、石室内に須恵器と共に供献されたと考えられ、このことから被葬者が鉄生産に関係する人物である可能性が考えられる。

註

(1) 引田 和司はか『畑ノ平古墳群』

『西大沢古墳群 畑ノ平古墳群 虫尾古墳群 黒土中世墓 茂平古墓 茂平城』
岡山県埋蔵文化財調査報告111 岡山県教育委員会 1996

(2) 園 正雄 『福古丸山遺跡』 勝央町文化財調査報告4 勝央町教育委員会 1989

(3) 山田 邦和 『須恵器生産の研究』 学生社 1988

(4) 田辺 昭三 『須恵器大成』 角川書店 1981

土器の観察については、安川豊史氏よりご教示を受けた。感謝申し上げます。

(5) 宇垣 匡雅 『川戸古墳群』 大原町教育委員会 1995

石室出土土器 観察表

図版番号	器種	口径	器高	調 整		回転	胎 土	色 調	焼成	残存率	備 考
				外 面	内 面						
1	須恵器坏蓋	12.2	4.2	回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	正	0.5mm程の白色砂粒含む	外(10V7/1)灰白 内(N8/0)灰白	良	100	
2	須恵器坏蓋	12.3	4.1	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	正	0.5mmの白色砂粒多量含む	外(N8/0)灰白 内(N7/0)灰白	良	100	底部に金ねじり痕?1-1.5cmの亀裂 痕あり
3	須恵器坏蓋	12.4	4.6	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	正	0.5-1.5mmの白色砂粒多量含む 1mm程度の黒鉄片も 2-3mmの白色角砂含む	外(N8/0)灰白 内(GP37/1)明青灰	良	99	外側大径部一部生焼け
4	須恵器坏蓋	13.3	4.2	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	正	0.5mm程の白色砂粒含む 3-5mmの白色角砂含む	外(SY7/1)灰白 内(GP37/1)明青灰	やや 不良	80	外側大径部に傷み状の溝が浅く 入りこむ
5	須恵器坏蓋	12.4	4	回転ヘラ削り後ナデ(削りナデ)	回転ナデ	正	1mm程の白色砂粒含む	外(7.5Y4/1)灰 内(GP37/1)灰白	良	50	内面一部生焼けが 浅く残っている
6	須恵器坏蓋	12.1	3.9	回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	正	0.5mmの白色砂粒多量含む	外(N6/0)灰 内(N8/0)灰白	良	100	
7	須恵器坏蓋	12.9	4.7	回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	正	0.5-1mmの白色砂粒多量含む 2mmの白色角砂含む	外(GP36/1)青灰色 内(GP37/1)明青灰	良	70	
8	須恵器坏蓋	12.9	4.1	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	正	0.5mm程の、黒鉄片を含む 3-5mmの白色角砂含む	外(10V7/1)灰白 内(7.5Y7/1)灰白	不良	50	外側大径部に若干土塊がつく (気泡)
9	須恵器坏蓋	13.2	3.7	回転ヘラ切後ナデ(削りナデ)	回転ナデ	逆	0.5mm程の白色砂粒多量含む 0.5mmの白色角砂含む	外(GP38/1)明青灰 内(N7/1)灰白	良	90	
10	須恵器坏蓋	11.8	4.2	回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	逆	0.5mmの白色砂粒多量含む	外(N8/1)灰白 内(N8/1)灰白	良	100	
11	須恵器坏蓋	12.3	4.2	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	正	4mmの白色角砂あり	外(10B5/1)青灰 内(10B6/1)青灰	良	100	
12	須恵器坏蓋	13.9	4.2	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	逆	0.5mm程の白色砂粒 2mmの白色角砂含む	外(G3G4/1)明青灰 内(10G4/1)暗緑灰	やや 不良	100	
13	須恵器坏蓋	13	4	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	正	0.5-1mmの白色砂粒含む	外(G3G6/1)青灰 内(7.5Y7/1)灰白	良	80	
14	須恵器坏身	11.1	4.5	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	正	0.5-1mmの白色砂粒多量含む	外(G3G7/1)明青灰 内(G37/1)明青灰	良	80	外側底部に灰がかかる
15	須恵器坏身	10.1	3.8	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	正	0.5-1.5mm程、黒鉄片多量 2-4mm(1.5mm)の 白色角砂含む	外(GP36/1)青灰 内(GP37/1)明青灰	良	100	
16	須恵器坏身	10.6	4.3	成形調整回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	逆	0.5-1.5mmの白色砂粒多量含む 2mmの白色角砂含む	外(N6/0)灰 内(N8/0)灰白	良	100	
17	須恵器坏身	10.5	4.1	回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	正	0.5mmの白色砂粒多量含む 2mmの白色角砂含む	外(GP36/1)青灰 内(N7/1)灰白	良	100	底部に土具痕?あり
18	須恵器坏身	12.1	4.2	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	逆	0.5-1.5mmの白色砂粒多量 2mmの白色角砂含む	外(N6/0)灰 内(N7/0)灰白	良	99	
19	須恵器坏身	10.9	4.3	回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	正	0.5mmの白色砂粒多量含む 0.5-1.5mmの白色角砂含む	外(N7/0)灰白 内(10V8/1)灰白	良	98	
20	須恵器坏身	11.1	3.6	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	逆	1-3mmの白色砂粒含む	外(N7/0)灰白 内(N6/0)灰	良	80	外側半面に傷みがかかる
21	須恵器坏身	12	4	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	正	1-2mmの白色砂粒含む	外(SY7/3)黄 内(SY7/1)灰白	不良	98	生焼け
22	須恵器坏身	11.7	4.3	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	正	0.5-1.5mmの白色砂粒含む	外(GY8/1)灰白 内(SY7/1)灰白	不良	90	生焼け
23	須恵器坏身	11.7	3.5	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ			外(N6/0)灰 内(G37/1)明青灰	良	40	
24	須恵器高坏	13.1	13.1	成形調整回転ヘラ削り後ナデ(削りナデ)	回転ナデ	正	1-3mm程の白色砂粒含む	外(GY96/1)青灰 内(N7/0)灰白	良	90	方形型、2方向通かし 底部は膠状工具で造り?
25	須恵器高坏	11.9	12.2	成形調整回転ヘラ削り後ナデ(削りナデ)	回転ナデ	正	1mm程の白色砂粒多量含む	外(GP36/1)青灰 内(GP36/1)青灰	良	98	底部下半部は、組み直し 跡あり、2方向通かし
26	須恵器高坏	10.8	12.2	成形調整回転ヘラ削り後ナデ(削りナデ)	回転ナデ	正	0.5-1mmの白色砂粒多量含む 1.5-2mmの白色角砂含む	外(N7/0)灰白 内(N6/0)灰白	良	100	底部に2本の沈線
27	須恵器高坏	11.2	14.6	成形調整回転ヘラ削り後ナデ(削りナデ)	回転ナデ	正	0.5-1mmの白色砂粒多量含む 1.5-2mmの白色角砂含む	外(N8/0)灰白 内(2.5GY4/1)灰白	良	100	
28	須恵器高坏			成形調整回転ヘラ削り後ナデ(削りナデ)	回転ナデ	正		外(GP37/1)明青灰 内(GP37/1)明青灰	良	100	底部に2本の沈線
29	須恵器高坏	10.2	6.6	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	正	0.5-1mmの、黒鉄片を含む 1.5-2mmの白色角砂含む	外(N7/0)灰白 内(N8/0)灰白	良	55	
30	須恵器高坏	10.2	6.3	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	逆	0.5-2mmの白色砂粒多量含む	外(N4/0)灰 内(GP35/1)青灰	良	80	重ね焼き痕が見られる
31	須恵器高坏	10.8	5.2	回転ヘラ切後ナデ	回転ナデ	正	0.5-1mmの白色砂粒多量含む 2mmの白色角砂含む	外(GP37/1)明青灰 内(GP36/1)青灰	良	100	NO.24の右半部の輪郭と類似
32	須恵器高坏	9.1	5.1	回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	正	0.5-1mmの白色砂粒多量含む	外(GP37/1)明青灰 内(G36-1)黄灰	良	100	一部に自然熱
33	須恵器高坏	9.5	7	回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	正	1-2mmの白色砂粒含む	外(GP37/1)明青灰 内(N7/0)灰白	良	100	
34	須恵器台坏類	11.2	7.6	回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	逆	1mm程の白色砂粒含む	外(GP37/1)明青灰 内(GP35/1)青灰	良	100	

図版番号	器種	口径	調整		回転	胎土	色調	施成	残存率	備考
			外面	内面						
35	須恵器はそう	9.2	11.1	摩滅が激しいため不明	回転ナデ?		外7.5Y8/20灰白 内7.5Y8/10灰白	不良	100	牛焼け 中央の穴のつくりが拙である
36	須恵器はそう	7.1	9	回転ナデ	回転ナデ	1mmの白色砂粒含む	外5P97/1明青灰 内N7/0灰白	良	100	
37	須恵器はそう	7.8	10.15	回転ヘラ削り後ナデ カキ目	回転ナデ	0.5-1mmの白色砂粒多く含む	外5PB7/1明青灰 内N7/0灰白	良	100	口縁部がぬがんでいる
38	須恵器はそう	8.3	10.5	ナデ削り後ナデ 下部 回転ヘラ削り?後ナデ	回転ナデ	0.5mm程度の砂粒 1-2mmの白色砂粒多く含む	外7.5Y8/1灰白 内10YR8/19灰白	不良	98	生焼けのため、摩滅が激しい
39	須恵器はそう	8.4	10	摩滅が激しいため不明			外7.5Y8/20灰白 内5Y8/2成黄	不良	100	牛焼け
40	須恵器 埴	4.5	8.4	回転ヘラ削り後ナデ 底部より回転ナデ	回転ナデ	0.5-1mmの白色砂粒多く含む	外410Y8/1灰白	良	100	4部が破損がひどく、どこかから 片断がはがれ落ちている
41	須恵器 埴	5.3	6.5	底部未調整	回転ナデ	0.5-1mmの白色砂粒多く含む 2-7mmの白色片断あり	5PB6/1青灰	良	100	胎土に角礫が目立つ 外壁に腐食後の傷が目立つ 作匠の気遣いを窺
42	須恵器 埴	7.1	8.4	上半部 回転ナデ カキ目 下半部 磨きヘラ削り	回転ナデ 底部同心円	0.5mmの白色砂粒多く含む 2-5mmの白色片断含む	5PB6/1青灰	良	95	青灰には光沢あり 青灰は不明瞭
43	須恵器 埴	6.1	9.9	下半部 回転ヘラ削り後ナデ	ナデ位ナデ?	0.5-1mm程度の砂粒 1-5mmの白色片断あり	外N8/0灰白	良	100	施成のため、カキ目が不明瞭
44	須恵器 埴	6	15.8	回転ヘラ削り後ナデ 回転ナデ	回転ナデ	1.5-2mmの白色片断含む	外5PB7/1明青灰	良	100	
45	須恵器 埴	7.9	17	回転ヘラ削り後ナデ 回転ナデ	回転ナデ	0.5-1mmの白色片断含む	外N6/0灰	良	80	腹部に2本の沈線 体部に2本の沈線
46	須恵器 平皿	7.4	17.4	回転ヘラ削り後ナデ カキ目	回転ナデ	0.5-1.5mmの白色砂粒含む 1.5-2.5mmの白色片断含む	外5PB6/1青灰	良	98	
47	須恵器 平皿	5.6	12.9	回転ヘラ削り後ナデ カキ目	回転ナデ	0.5-1mmの白色片断含む 6mmの白色片断含む	外N8/0灰白	良	100	
48	須恵器 平皿	7.2	15.7	回転ヘラ削り後ナデ カキ目	回転ナデ	1.5mmの白色角礫含む	外N5/0灰 内5Y8/2灰白	不良	70	
49	須恵器 提灯	6	13.1	ヘラ削り後回転ナデ 一部カキ目	回転ナデ	1mmの白色砂粒含む	外7.5Y7/1灰白	良	100	耳は同心 カキ目が不明瞭
50	須恵器 提灯	7.5	22		回転ナデ	0.5mmの白色砂粒含む 2-4mmの白色片断多く含む	外7.5Y6/2成黄オーリーブ	良	98	体部にカキ目
51	須恵器 提灯	7.1	21.8	頸部回転ナデ	回転ナデ	0.5-1mmの白色砂粒含む 0.5-2mmの白色片断多く含む	外N7/0灰白	良	98	体部にカキ目
52	須恵器 提灯	9.8	26.4	頸部回転ナデ	回転ナデ		外N7/1灰白	不良	80	耳なし

その他の出土土器

図版番号	器種	口径	調整		回転	胎土	色調	施成	残存率	備考	
			外面	内面							
53	須恵器 坏壺	12.1	3.7	回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	0.5-1mmの白色砂粒含む 1.5mmの白色片断含む	外4Y7/1灰白 内N7/0灰白	良	90		
54	須恵器 坏身	11.2	3.4	回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	正 0.5mmの白色砂粒含む	外N7/0灰白 内5PB7/1明青灰	良	75	受胎に東向ききの胎土付着 外周面に自然積	
55	須恵器 椀	10.1	5.6	回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	0.5-1mmの白色砂粒含む	外N7/0灰白 内N8/0灰白	良	30	口縁変色	
56	須恵器 椀	2.2			ナデ位ナデ?		0.5-1mmの白色砂粒含む 1.5mmの白色片断含む	外・内N7(0)灰白	良	20	集合の土残存 成部未調整
57	十部 器 坏	12.9	2.9	回転ナデ 底縁未調整	回転ナデ	0.5-1mmの白色砂粒含む 1.5mmの白色片断含む	外・内10YR8/4成黄	良	40	口縁変色	
58	十部 器 坏	11.5+	3	回転ナデ 底部未調整	回転ナデ	1.5mmの白色角礫含む	外・内10YR8/3成黄	良	30	口縁変色	
59	十部 器 坏	11.8+	3	回転ナデ 底部未調整	回転ナデ	0.5-1mmの白色砂粒含む 1.5mmの白色片断含む	外7.5YR7/4黄い煙 内10YR8/4成黄	良	40	口縁変色	
60	須恵器 椀	2.2		回転ナデ 摩滅が激しいため不明	回転ナデ	0.5-1mmの白色砂粒含む 2-3mmの白色片断多く含む	外・内10YR8/3成黄	不良	30	口縁変色	
61	須恵器 椀	1.7		摩滅が激しいため不明 底部未調整	回転ナデ		外410YR8/3成黄 内2.5Y8/3成黄	不良	20	口縁変色	
62	瓦質土器 羽釜	30.8+		口径部回転ナデ 体部指押後削りハケ目	横ハケ目		外・内10YR8/1成黄	良	30	口縁変色	
63	土 鍋	33+		口径部回転ナデ 体部指押後ナデ 回転ナデ	横ハケ目	磨	外・内N4/0灰	良	40	口縁変色	

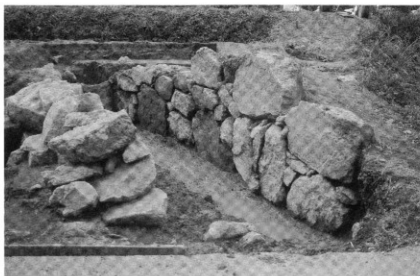
図版 1



発掘調査前状況(東から)



大塚5号墳 横穴式石室完掘状況(正面 南から)



石室東側写真(西から)

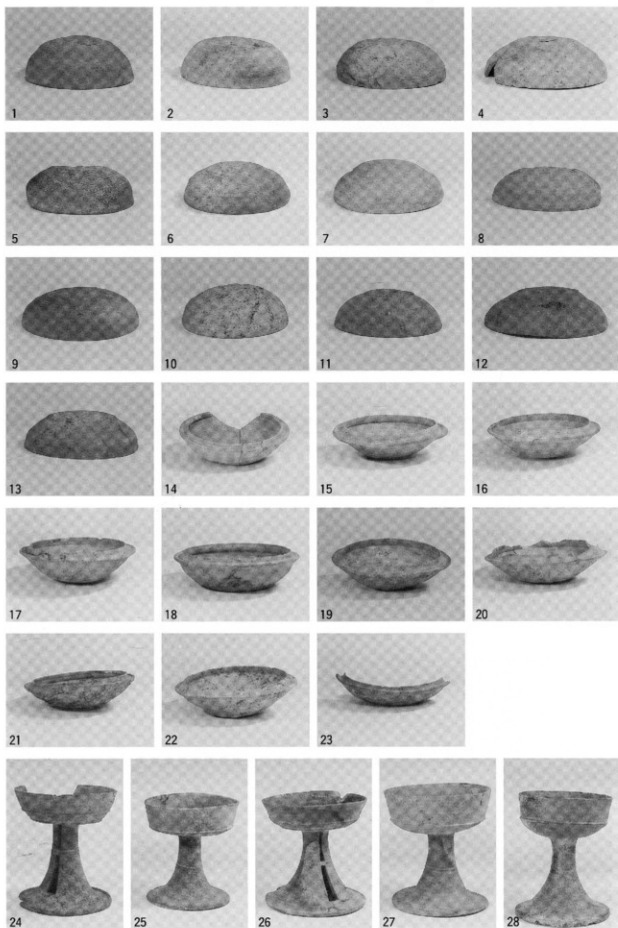


石室西側写真(東から)

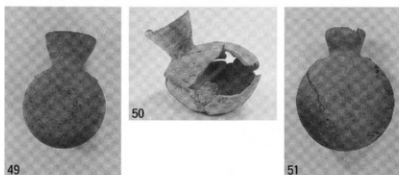
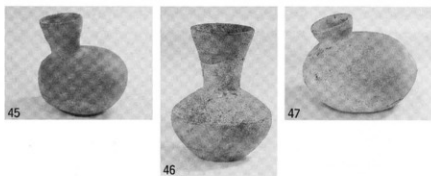
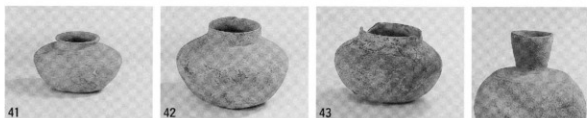
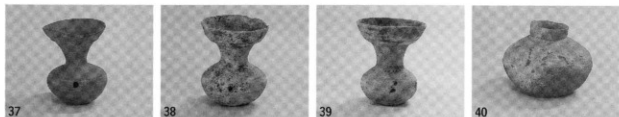
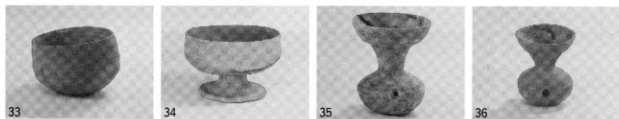
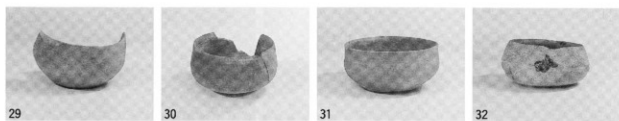


トレンチ断面(南から)

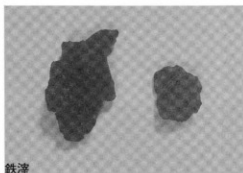
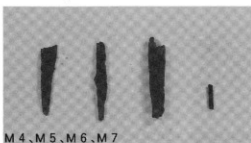
图版 3



出土遺物1)

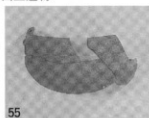


図版 5



出土遺物(3)

その他の出土遺物



報 告 書 抄 録

ふりがな	おおつか5ごうふん							
種名	大塚5号墳							
シリーズ名	美作町廻藏文化財調査報告							
シリーズ番号	1							
編著者名	池田和雅							
編集機関	美作町教育委員会							
所在地	〒707-8501 岡山県美田郡美作町栄町35 TEL 0868-72-2900							
発行年月日	2002年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°	°	m ²		
おおつか 大塚5号墳	おかもまけんあいだくふん 岡山県美田郡 みまさからよう 美作町 なかやまあざうめくら 中山字徳ヶ口 1366			34° 59' 50"	134° 07' 36"	20001031 ～ 20001205	42	町道大谷線拡幅工事に伴う発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大塚5号墳	古墳	古墳時代 (中世)	横穴式石室	鉄器 須恵器 中世土器				

美作町埋蔵文化財調査報告第1集

大塚五号墳

町道大谷線拡幅工事に伴う
発掘調査報告書

2002年3月31日発行

編集・発行 美作町教育委員会
〒707-8501 岡山県英田郡美作町栄町35
TEL (0868)72-2900

印刷 株式会社廣陽本社
〒708-0052 岡山県津山市田町22
TEL (0868)22-7221
